

P-11.

ヒト B リンパ腫細胞における IFN- α 刺激による NF- κ B を介した anti-apoptotic pathway

(大学院単位取得・小児科学)

○金高 由季

(免疫学)

矢那瀬紀子、水口純一郎

(小児科学)

星加 明徳

IFN- α は、hairy cell leukemia、慢性骨髄性白血病、腎細胞癌などの治療に使われている。しかし抵抗性のことも多く、その分子機構は大部分がまだ解明されていない。我々は最近、ヒト B リンパ腫細胞系 Daudi において、IFN- α が TNF 関連アポトーシス誘発リガンド (TRAIL) の up-regulation を介してアポトーシスを誘発することを証明した。さらに、TRAIL に誘発される caspase-8 活性とアポトーシスとに拮抗する competitive binding of FLICE-inhibitory protein (cFLIP) が IFN- α によって upregulate されたことを元に、今回 Daudi 細胞において IFN- α がどのように cFLIP を upregulate するかについて検討した。IFN- α 刺激の 48 時間後に G1 arrest が起こり、48 時間から 72 時間の間にアポトーシスが誘導された。cFLIP の発現は IFN- α 刺激の 24 時間後に約 3 倍に upregulate され、72 時間後には無刺激の時と同程度に減少した。同様に、骨髄腫細胞株 U266 細胞でも IFN- α 刺激に対する cFLIP の増加がみられた。また、IFN- α に誘発された cFLIP の up-regulation は NF- κ B の inhibitor (BAY11-7082) を用いることによって大きく抑制された。これらのことは NF- κ B が IFN- α に誘発される cFLIP の up-regulation を調節し、アポトーシス誘導を延長させるということを示唆している。以上のように、Daudi 細胞において IFN- α は pro-apoptotic とともに抗 apoptotic シグナル系を刺激する。そのバランスは細胞の運命を決定付けるかもしれないと推測される。

P-12.

異なる 2 つのタイプの分岐型人工血管の PWV を用いた比較検討

(大学院単位取得・外科学第二)

○岩橋 徹

(外科学第二)

内山 裕智、佐藤 正弘、槇村 進

佐々木 司、小泉 信達、小櫃由樹生

重松 宏

【目的】 脈波伝播速度 (PWV: Pulse Wave Velocity) は、動脈弾性度の指標として用いられ、心血管病変の予測因子として注目されている。今回、腹部大動脈瘤患者に対して末梢側の口径が異なる 2 種類の分岐型人工血管を用いて手術を行い、術前後の PWV を測定し、比較検討した。

【方法】 2003 年 5 月から 2006 年 9 月までに腹部大動脈瘤に対し分岐型人工血管置換術を施行された患者のうち、末梢側吻合を総腸骨動脈で行い、術前 API が 0.9 以上であった、36 例、62 肢を対象とした。患者背景に有意差は認めなかった。使用したグラフトは従来のタイプ (Conventional Type: C 群) と従来より末梢側口径が 1 mm 太いタイプ (New Type: N 群) の分岐型人工血管を使用した。術前、術後 1 週間目に収縮期血圧、心拍数、上腕-足首動脈間 PWV (baPWV)、ABPI を測定した。

【結果】 *in vitro* での比較では N 群の方が血管抵抗が少なかった。人工血管置換術後、PWV は有為に上昇を示した。($p=.0029$)、両群間においては C 群は術後 PWV の有意な上昇を示した (C 群: $1,892 \pm 323 \rightarrow 2,126 \pm 439$ cm/sec、 $p=.0029$ 、N 群: $1,899 \pm 542 \rightarrow 1,980 \pm 397$ cm/sec: $p=NS$)。

【考察】 New Type と Conventional Type の術前後の PWV を比較したところ、Conventional Type の方が有意に PWV 値の上昇を示し、New Type に比して、長期予後において、心血管系のリスクが高い可能性が示唆された。